



楽市で賑わう
ロープウェー商店街

「共働で地域力発揮」

「ロープウェー商店街を活気づける方法は無いか」こんな依頼から「なもし開縁隊」の歴史は始まった。ポロポロになったアーケードを取り払い、景観整備の工事準備にとりかかったばかりの商店街は、人足も途絶えがちになっていた。しかも販促のための予算はほとんど無いときた。

当時、私は長年勤めていた広告会社を退社したばかり。時間的には有り余るほどの余裕があった。ロープウェー街の地理的条件を考え、市民広場構想を打ち出した。小さな農家、商業者、市民、商店などが自由に出入できる街の広場：ヨーロッパのマル

シェミtainなものだ。愛媛県内を走り回り農家、水産業者、商業者に参加を呼びかけた。

企画は当たった。11月3日勤労感謝の日

に「門前まつり」とあわせて「城下楽市」を開催。およそ2万人の人数があった。ロープウェー商店街の企画は、今でも継続して行われている。

この実績で、道後にぎたつの道日曜朝市のコーディネートを任せられることになった。3年間運営に携わったのち、運営そのものは道後温泉旅館組合に移管した。松山市のフィールドミュージアム構



採れたての野菜は人気の的

想のサブセンターゾーンに指定され、私の本拠地でもある三津浜の活性化を手伝えといわれたためだ。

三津浜活性化のブランドデザインを考え、三津浜夢港計画実行委員会の創立から参加。町の顔造りにとりかかった。いわゆる「お好み焼きでまちおこし」である。段階を経た最終の目標は、鮮魚という三津浜の地域資源を活かした市民市場の開設である。この三津

浜の計画では今年、経済産業省の「平成21年度産学連携人材育成事業（起業家人材育成事業）大学・大学院起業家教



NPO法人 なもし開縁隊
代表 門屋 哲朗



人出で賑わう道後朝市



東温市河之内棚田風景



参加者全員で田植え式



愛媛大学環境ESDも参画



イノシシ被害を防ぐ電柵設置

育推進ネットワーク起業家教育モデル講座事業」松山大学モデル講座に参画している。

まちづくりを含めた地域活性化には、地域資源を活かした人的交流、地域間交流、経済活動等を欠かすことはできない。下世話な表現だが「人・モノ・金」対象となる地域のトータルマネージメントが必要になってくる。市内中心部、港町、里山それぞれの場所には特有の資源が存在する。その組み合わせは多岐に亘る。それらを自在に結ぶことで持続可能な社会造りも可能になってくる。

そのための基本的な考え方は、実例だ。まず、将来どうあるべきかを

見据えた基本計画。目に見える旗印。あとは時間軸と空間軸に沿った個別計画の実施。平面ではなく三次元のプランが必要だ。昨年の現地調査から始まった東温市河之内地区の「里山のお米づくりプロジェクト」もこの考え方がベースになっている。

お米だけを目的とするなら、スーパーで購入するほうが遥に簡単で安い。プロジェクトの契約は1a当り3万円と高額だ。収穫量で計算すると低価格米の実に3倍の値段になる。汗水たらして3倍のお米を買う：こんな馬鹿げた話は無い。それでも今年7組の契約があった。金銭だけではないということだ。

来年は、計画に従って新たな試みを行う。一つは企業参加の促進。環境教育のフィールド造り。そしてもう一つ、保養・観光農業に向けての環境整備だ。河之内を舞台とした新しい生活提案、生活価値を創造する必要がある。生活の多様性づくりだ。河之内にあればお米づくりを基本とした自給自足が出来る。楽しみながら自然保護・環境保全も出来る。まるで絵に描いた餅みたいだが、楽しくなければ誰も見向きもしないだろう。まずは自分が楽しむ。そして伝える。ここからが始まりだ。